1ST
CELEBRATE HANUKKAH

雅歌 (2)　私は黒いけれども美しい

2022. 12.20(朝)

「ハヌッカーの祭り」の大切な視点

1. 「スッコート」と「ハヌッカー」は、二つで一つであること
2. キリストの花嫁は、ストイケイアから完全に脱却すること
3. 花嫁の献身は、神への「芳しい香り」であること
4. 神のご計画を意識しながら歩む、きわめて夢のある未来的志向をもった祭りであること

1. ベレーシート ①

●前回の雅歌では1章2～3節にある「花嫁の霊性」について学びました。「口づけ」に象徴される花婿のことばを慕い求める花嫁に、そのことが表されていました。それは花婿の語りかけが、この世の喜びの象徴である「ぶどう酒」よりも、はるかに勝る麗しいものであることを知っているからでした。

●今回は1章5～6節を取り上げます。ここには花嫁のアイデンティティー(5節)と、花嫁が置かれている不安な状況ゆえに花婿を捜し出そうとする姿(6～7節)が預言的に啓示されています。

【新改訳2017】雅歌1章5～6節

5 エルサレムの娘たち。ケダルの天幕のように、ソロモンの幕のように、
私は黒いけれども美しい。

6 あなたがたは私を見ないでください。私は日に焼けて、浅黒いのです。
母の息子たちが私に怒りを燃やし、私を彼らのぶどう畑の番人にしたのです。
でも、私は自分のぶどう畑の番はしませんでした。

1. ベレーシート ②

●5節を第一情報である原文で見てみましょう。
エルサレムの娘たち。ケダルの天幕のように、ソロモンの幕のように、
私は黒いけれども美しい。

シェローモー	キーリーヨート	ケーダール	ケアーホレー	イェルーシャーライム	ベノート	ヴェナーヴァー	アニー	シェホーラー
שְׁלֹמֹה׃	כִּירִיעוֹת	קֵדָר	כְּאָהֳלֵי	יְרוּשָׁלִַם	בְּנוֹת	וְנָאוָה	אֲנִי	שְׁחוֹרָה
ソロモンの	幕のように	ケダルの	天幕のように	エルサレムの	娘たち	美しい	私は	黒い

●原文を見ると分かるように、「私は黒いが美しい」
(「シェホーラー・アニー・ヴェナーヴァー」שְׁחוֹרָה אֲנִי וְנָאוָה)というフレーズがはじめに置かれています。「黒くて美しい」ではなく、「黒いけれども美しい」と、「黒い」ことと「美しい」ことが逆説的に訳されています。

2.「私は黒いけれども美しい」①

●「私」と表記されているのは「花嫁」で、その花嫁とは「シュラムの女」(6:13)です。「シュラム」とは田舎者という意味ですが、イェシュアの弟子たち(イスカリオテのユダを除く)はガリラヤ出身でした。少なくとも彼らのうち四人は漁師で、「無学な普通の人」(使4:13)でした。やがて彼らはイェシュアの花嫁となる者たちですが、そんな花嫁が「私は黒いけれども美しい」と預言的に語っているのです。

●まず、5～6節は誰に対して語っているのでしょうか。それは「エルサレムの娘たち」に対してです。「エルサレムの娘たち」とは誰のことでしょうか。娘たちと訳された「ベノート」は「バット」(בַּת)の複数形で、「バッツィヨーン」(בַּת־צִיּוֹן)と言えば「シオンの娘」を、つまり「イスラエルの民」を意味します。しかし「エルサレムの娘たち」は雅歌にしか使われていません(7回―1:5/2:7/3:5, 10/5:8, 16/8:4)。

2.「私は黒いけれども美しい」②

●「エルサレム」はヘブル語で「イェルーシャーライム」(יְרוּשָׁלַיִם)と言います。これは二つの言葉から成っています。一つは「イェルー」(יְרוּ)で、もう一つは「シャーレーム」(שָׁלֵם)です。「イェルー」の語源は「見る」という動詞「ラーアー」(רָאָה)の未完了形で、「主はご覧になっている」という意味です。「シャーレーム」(שָׁלֵם)は「成就する、完成する」という意味です。この二つの言葉から、「エルサレム」(イェルーシャーライム)とは「神がご覧になっていることが完成するところ」と解釈できます。そして、そこに「イスラエルの民」がいることを啓示しているのが「エルサレムの娘たち」なのです。なぜ「娘たち」なのかと言えば、固有名詞の「エルサレム」が女性名詞だからです。

2.「私は黒いけれども美しい」③

●5節で、花嫁はこの「エルサレムの娘たち」に対して「私は黒いけれども美しい」と言っているのです。このことばが意味することは何でしょうか。訳文の5節は「①エルサレムの娘たち。②ケダルの天幕のように、ソロモンの幕のように、③私は黒いけれども美しい。」とありますが、原文では③ ① ②という順です。つまり原文では、花嫁が「私は黒いが美しい」ということを「エルサレムの娘たち」に向かって語っているのです。そしてこの「黒いけれども美しい」という表現は、「黒い」(「シェホーラー」שְׁחוֹרָה)が「ケダルの天幕のように」たとえられ、「美しい」(「ナーヴァー」נָאוָה)が「ソロモンの幕のように」たとえられています。「美しい」と訳された「ナーヴァー」(נָאוָה)は「麗しい、ふさわしい、愛らしい」とも訳されます。

2.「私は黒いけれども美しい」④

●「ケダルの天幕」と「ソロモンの幕」とは真逆(両極端)の事柄です。「ケダル」とはイシュマエルの十二人の子どもの第二子です。彼らは遊牧民として黒いやぎの皮で天幕を作り、神に従わない異邦の民となります。ソロモンと比べるならば、彼らは貧しい者たちの代表と言えます。一方の「ソロモンの幕」は美しい糸で紡いだ幕で、幕屋で使われる幕のように見るからにきらびやかで高価な代物です。このように、花嫁は自分のことを「黒いけれども美しい」と逆説的な表現をしているのです。

●「美しい」と訳された形容詞の「ナーヴァー」(נָאוָה)、あるいは「ナーヴェ」(נָאוֶה)は、外面的な容姿が「麗しい、美しい、愛らしい、ふさわしい」という意味です。なぜなら、花婿が花嫁に「あなたの顔(姿)は愛らしい」「あなたの口は愛らしい」「あなたはエルサレムのように愛らしい」と語っているからです。

2.「私は黒いけれども美しい」⑤

●使徒ペテロやパウロが、クリスチャンについて以下のように逆説的な表現で記しています。しかしその真逆の間にキリストが入ることで、それらが成立するのです。

(1) 以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、あわれみを受けたことがなかったのに、今はあわれみを受けています。(Ⅰペテロ2:10)
(2) すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵み(=キリストの測り知れない富を福音として異邦人に宣べ伝えるという恵み)が与えられた(エペソ3:8)
(3) 悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています。(Ⅱコリント6:10)
(4) 私が弱いときにこそ、私は強い・・・(Ⅱコリント12:10)

2.「私は黒いけれども美しい」⑥

●こうした逆説的表現が「私は黒いけれども美しい(נָאוָה)」という花嫁のことばに込められています。そしてそれを可能にしてくれているのが、花婿の「女の中で最も美しい人(冠詞付きのיָפָה)、あなたは美しい(יָפָה)」(8,15節)ということばなのです。「ヤーファー」(יָפָה)は外面的な美しさと内面的な美しさ(聡明さ)を含んだ語彙です。この形容詞は女性のみならず、男性に対しても使われています。

①サラ　②ラケル　③ヨセフ　④ダビデ　⑤アビガイル(ナバルの妻で後にダビデの妻となる)　⑥アブシャロム　⑦タマル(ダビデの一人娘、アブシャロムの妹)
⑧シュネムの女アビシャグ(晩年のダビデを介助した娘)　⑨エステル
⑩ヨブの娘たち(ヨブが悔い改めた後に与えられた娘たち)

●このように、花嫁のアイデンティティーは花婿の愛のことばに支えられているのです。

3. 花嫁が黒いことの理由①

●ところで、6節では花嫁が「私は黒いけれども美しい」と言わざるを得なかった理由が記されています。それは花嫁が「エルサレムの娘たち」から「黒い」と罪定めされ、軽蔑され、迫害されているからです。

6節前半

あなたがたは私を見ないでください。私は日に焼けて、浅黒いのです。

ハッシャーメシュ	シェッシェザーファトゥニー	シェハルトーレット	シェアニー	ティルウーニー	アル
הַשָּׁמֶשׁ	שֶׁשָּׁזָפַתְנִי	שְׁחַרְחֹרֶת	שֶׁאֲנִי	אַל־תִּרְאוּנִי	
その太陽が	私を日焼させた	関代 黒ずんだ	私 関代	あなたたちは私を見ないでください	

(日焼けした私)　　語源=「シャーハル」(שָׁחַר)

3. 花嫁が黒いことの理由 ②

●「私は日に焼けて、浅黒いのです」という理由に、「母の息子たちが私に怒りを燃やし、私を彼らのぶどう畑の番人にした」ことを挙げています。これはどういうことでしょうか。「母の息子たち」とは誰のことでしょうか。それは「エルサレムの娘たち」(＝将来メシアを受け入れる「イスラエルの残りの者」)の兄弟たちのことで、権威ある者たちです。それは「ストイケイア」といわれる宗教の霊に支配された神殿ユダヤ教、律法学者たちのことです。怒りを燃やした彼らによって、花嫁は「黒い」ものとされてしまったのです。つまり「罪定めされた」のです。初代教会の弟子たちを見るなら、その光景が見えてきます。

●使徒の働き3章を思い起こしてください。使徒のペテロとヨハネが祈りのために宮に上って行ったとき、そこに「生まれつき足の不自由な人」が運ばれて来ました。

3. 花嫁が黒いことの理由 ③

●この人は毎日「美しの門」と呼ばれる宮の門に置いてもらっていました。彼は宮に入ろうとしていたペテロとヨハネに施しを求めました。このことから、何が起こったのかは語るまでもありません。イェシュアが御国のことを語っただけでなく、御国が来ると何が起こるかをしるし(奇蹟)によってデモンストレーションしたように、ペテロとヨハネが「イェシュアの名によって立ち上がり、歩きなさい」と言って、彼を立たせたのです。そのようにして「生まれつき足の不自由な人」は初めてペテロとヨハネとともに宮の中に入って行ったのです。これはやがて「イスラエルの残りの者」が、イェシュアをメシアであると信じて、悔い改め、メシア王国に入って行くことになるという預言的なデモンストレーションでした。大勢の者がこの出来事に驚きましたが、ユダヤの指導者たちは苛立ち、ペテロとヨハネを捕らえて「おまえたちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問します。そのあとで彼らは協議して、事実は否定できないとしながらも、これ以上このことが民の間に広まらないように、脅しておこうということになり、二人を脅した上で釈放したのです。

3. 花嫁が黒いことの理由 ④

●花嫁が「黒い」「日に焼けて、浅黒く」なってしまったのは、「母の息子たちが私に怒りを燃やし」たためであり、それゆえに、「エルサレムの娘たち」からも批判され、軽蔑されるような、冷淡な扱いを受ける存在、彼らの妬みの対象となってしまったからに他なりません。神は本来、「母の息子たち」であるユダヤ教の指導者たちに、神の見張り番となるように求めておられました。

【新改訳2017】イザヤ書62章6～7節

6　「エルサレムよ、わたしはあなたの城壁の上に見張り番を置いた。
　終日終夜、彼らは、一時も黙っていてはならない。
　思い起こしていただこうと【主】に求める者たちよ、休んではならない。
7 主を休ませてはならない。主がエルサレムを堅く立て、
　この地の誉れとするまで。」

3. 花嫁が黒いことの理由 ⑤

●本来ならば「母の息子たち」が「ぶどう畑の番人」の務めをするはずでした。しかしその務めを怠ったために、花嫁がそれをさせられる羽目になってしまったのです。「私は自分のぶどう畑の番はしませんでした」とは、無学の普通の人の立場ではなくなったという意味です。「ぶどう畑」とはイスラエルのことで、その「番人」とはイスラエルに神のご計画が成就することを終日終夜見張る「見張り番」の務めを意味します。彼らがなすべき「ぶどう畑の番人」の務めを花嫁がすることになったので、花嫁は「日に焼けて、浅黒く」なってしまったというのです。それは罪定めされ、迫害という苦しみを受けることを意味しています。これが「私は黒い」という意味です。しかしそれは神の選びであり、神の按配であり、神の賜物と特権であり、花嫁の美しさでもあるのです。初代教会の最初の殉教者となったステパノは、ユダヤ当局によってまさに「黒い」(「シェホーラー」שְׁחוֹרָה)と罪定めされた人ですが、花婿にとっては最も美しい花嫁だったのです。聖霊に満たされた(「ピンプレーミ」πίμπλημι)ステパノが殉教するさまは、イェシュアの姿とまさに瓜二つです。それゆえ、イェシュアは御座から立ち上がってステパノを支えています(使徒7:55～56)。

4.「黒い」ことと「切に求める」ことは同義 ①

●花嫁が「黒い」のは宿命的なことのようです。なぜなら、「黒い」(「シャーホール」שָׁחוֹר)と訳された語源の「シャーハル」(שָׁחַר)は、「熱心に求める」「切に捜し求める」という花嫁の渇望用語です。主を切に尋ね求めることは「黒く」なることでもあるのです。つまり、花嫁は「苦しみを併せ持つ」ことを余儀なくされるのです。

●ダビデは「シャーハル」経験として、サウル王の執拗な妬みによって荒野を放浪することを余儀なくされました。以下の詩篇はこの経験を歌っています。

【新改訳2017】詩篇63篇1節

神よ あなたは私の神。私はあなたを切に求めます(שָׁחַר)。
水のない 衰え果てた乾いた地で　私のたましいは あなたに渇き(צָמָא)
私の身も あなたをあえぎ求めます(כָּמַהּ)。

4.「黒い」ことと「切に求める」ことは同義 ②

●「切に求めます」と訳された動詞が「シャーハル」(שָׁחַר)です。口語訳は「たずね求め」と訳し、新共同訳は「捜し求め」と訳しています。「渇く」(「ツァーマー」צָמָא)と「あえぎ求める」(「カーマー」כָּמָה)も、渇望用語と言えます。この詩篇はダビデの神に対する渇望が色濃く表現されています。詩篇の表題は「ダビデがユダの荒野にいたときに」となっています。ダビデがユダの荒野にいたときとは、サウル王に命を狙われて荒野を放浪していたとき、あるいはアブシャロムのクーデターのときが考えられます。いずれにしても、ダビデのすごさはそうした暗闇のときこそ、神との絆が一層深められる機会としたことです。花嫁の霊性の一つです。

●このことは「キリストの花嫁」である私たちにとっても大きな励ましです。花婿を慕い求める者には、必ず「黒い」とされる「苦しみの経験」が伴うということです。しかしそのときこそが、神とのかかわりの絆がより一層強められる機会となるのです。

4.「黒い」ことと「切に求める」ことは同義 ③

●宗教指導者たちによって脅されたペテロとヨハネは、釈放されたあとに仲間のところに行って、祭司長や長老たちが言ったことを残らず報告しました。これを聞いた主にある者たちはどうしたでしょうか。彼らは心を一つにして、神に向かって声を上げます。「あなたのみことばを大胆に語らせてください」と。すると集まっていた場所が揺れ動いて、一同は聖霊に満たされて(力としての外からの満たしである「ピンプレーミ」πίμπλημι)、神のことばを大胆に語り出したとあります。このように、「黒く」罪定めされた花嫁は、花婿をより「切に求める」契機とされるというのが花嫁の霊性なのです。

●私たちはそのような花嫁となっているでしょうか。「黒い」と非難されるということは、キリスト馬鹿になっていることの証拠です。「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです」(使徒4:12)と大胆に宣言するからです。

4.「黒い」ことと「切に求める」ことは同義 ④

●もしもキリストの花嫁が脅しに対して恐れを抱いてしまったとしたら、果たして花嫁になることができるでしょうか。携挙される保証があるでしょうか。携挙されずに信仰のやり直し、ということになるかもしれません。それほどに花嫁の献身の愛は一途なのです。

●「シャーハル」(שָׁחַר)は「真面目に、熱心に、本気で神を求め、神を捜し求めること」を意味します。箴言8章17節には「わたしを愛する者を、わたしは愛する。わたしを熱心に捜す(שָׁחַר)者は、わたしを見出す」とあります。

今回のまとめ

●「私は黒いけれども美しい」。
このことばを心に深く留めたいものです。
花嫁はだれにでも受け入れられるような、八方美人ではないのです。

【新改訳2017】Ⅱコリント人への手紙2章15～17節
15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、
神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。
16 滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり、
救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りです。
このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。
17 私たちは、多くの人たちのように、神のことばに混ぜ物をして売ったり
せず、誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前で
キリストにあって語るのです。